

金光教の声

(平成21年7月～9月放送分)

No.388

【おへん】

ありがとうの手紙・・・・・・・・・・・・・・・・	3	『L I F E』第3回／高校受験・・・・・・・・	36
朗読ボランティアに携わって・・・・・・・・	8	『L I F E』第4回／高校三年生・・・・・・・・	41
白いワンピース・・・・・・・・・・・・・・・・	13	『L I F E』第5回／はじめてのアルバイト・・・・・・・・	46
親子で楽しい科学実験・・・・・・・・・・	17	『L I F E』第6回／仕事・・・・・・・・・・	51
悲しいけれどそれは母の最後の親孝行でした・・	22	『L I F E』第7回／結婚・・・・・・・・・・	57
『L I F E』第1回／誕生・・・・・・・・・・	26	『L I F E』第8回／命を授かる・・・・・・・・	63
『L I F E』第2回／小学生・・・・・・・・	31	『L I F E』第9回／子育て・・・・・・・・	67

金光教放送センター

「ありがとう」

わずか5文字ですが、心が温もり、うれしくなる魔法の言葉です。でも、照れくさくて、素直に言えない、そんな言葉でもありません。

今日は、リスナーの皆さんに、日頃は言えない「ありがとう」の気持ちを手紙にして送っていただきました。

まずは、遠くハワイにお住まいの安武エイミーさんという30歳の女性からです。以前、日本に留学し

ていた時のことをつづったお便りです。

§

「日本とハワイにいる家族と友達へ」

大学3年生の時、日本に留学することになって、日本にいる親せきの叔父さん、叔母さんたちに大変お世話になりました。また、ハワイから離れて寂しがっていた私に、日本の良さを教えてくれた友達に感謝しています。

留学前は、両親の故郷である日本のことをあまり知らなくて、自分とは遠く離れた国ぐらいにしか思っていなかったのですが、留学した1年の間に、日本が大好きになりました。

大学を卒業してから、すぐ岡山の高校で英会話を教えることになりました。何も分からなかった私に

親切に指導してくださった先生方と、可愛い生徒た

§

ちに大変感謝しています。おかげで、岡山で過ごした3年間が一生忘れられない思い出となりました。

ずっと背中を押してくれている家族と、引っ張ってくれている友達がいなければ、私はこれまでの人生を歩み切ることができなかつたでしょう。恥ずかしくて、口ではなかなか言えないけれど、心から「ありがとうございます」と伝えたい。そして、「これからよろしくお願いします」。

最後に、こういう家族と友達を授けて下さった神様に感謝しています。

§

続いて、神奈川県鎌倉市の67歳・吉岡裕子さんからのお便りです。

「神様に見守られて」

毎日元気で夫と二人、心豊かに楽しく過ごさせていただいていることを神様に何とお礼を申し上げてよいのやら…。

何年前前のこと、夫がひどい腹痛で、救急車で病院に運ばれた時には、すでに盲腸が裂けて腹膜炎を起していました。すぐに手術をし、一命を取り留めることができました。

また、私は急性緑内障になり失明してもおかしくないと、医師の懸命な対応のおかげで大事に至ることなく今日にいたっています。

他にも、朝目覚めること、お手洗いを順調にさせていただけること、おいしく食事が頂けること、安

心して夜休ませていただけることなど、一つひとつの
ことをいくら感謝してもし尽くせません。毎日、
夫と「ありがたい。ありがたい」と、喜びの日々を
過ごさせていただいております。その度に、神様が
いつも側について下さっていることを感じ
ています。

§

続いては、島根県松江市の25歳・高橋啓介さんか
らのお便りです。

高橋さんは、中学時代にいじめに遭い、高校では
いじめの側になり、中退。その後、仕事を何度も変
えるなど、紆余曲折がありました。今では結婚し
て家庭を持ち、一生懸命仕事に励んでいるそうです。

ご両親への思いのこもったメッセージです。

「お父（おとう）とお母（おかあ）」

§

産んでくれてありがとう
泣いてくれてありがとう
心配してくれてありがとう
一緒に謝ってくれてありがとう
今まで育ててくれてありがとう
いつもいつも、お父とお母には迷惑ばかりかけて
るけど、これからもよろしく。いつまでも長生きし
て下さい。

§

最後は、愛知県稲沢市の78歳・田内美伎子（たう

ち・みきこ）さんから亡くなったご主人へのお便りです。

§

「今は亡きあなたへ」

昭和30年10月13日。私たちが夫婦としての第一歩を踏み出した日です。

あなたと交際して1年5カ月。プロポーズの言葉は、「君と結婚したら、いつも明るく楽しい家庭生活が築けるだろうね」。私の返事は「経済的な苦労はどんなことも平気だけれど、女性問題は絶対にダメ」でした。果たしてお父さんの理想とする家庭生活、営まれてきたかしら。

それから37年、3人の子どもに恵まれました。子どもたちも一人前になり、それぞれ家庭を持ちホッ

とした平成2年5月、あなたの胃にガンが見つかりました。気の弱いあなたにそのことを伝えることができず、最後まで嘘をつき通すことにしました。

あなたは何度も何度も自分の病気に不安を持ち、私に聞きましたね。でも私は最後まで隠し通しました。

いよいよ最後のその時。ガーゼで口元に水を当てる時、あなたはかすかな声で「ありがとう。ありがとうな」の一言を言ってくれました。

あなたが亡くなって16年。今、私はあなたのお墓の前で、生前、素直に言えなかった「ありがとう」をお伝えします。

お父さん、本当にありがとう。

§

4人の方々、素敵なお便りをありがとうございました。

私たちはいつも多くの人に支えられていますが、
つい見落としがちです。

「神様のおかげは喜びの心からわき出てくる」と、
金光教祖は教えています。

「ありがとう」は、言う人にも言われた人にも、
ほほ笑みが生まれる不思議な言葉。

「ありがとう」

があふれる世の中でありませうように。

金光教放送センター

ナレ 大阪市にお住まいの津多津子さんは、20年以

上にわたり、視力障害者への支援ボランティア
アグループに参加しています。図書館などで
は本を朗読し、カセットテープに録音したも
のを貸し出していますが、津さんは、そのテ
ープを作るための吹き込みをしています。そ
れ以外にも新聞記事の中から、経済や健康、
地域情報、連載小説の情報テープを作ってい
ます。

津 私たちは目が不自由な方々に色々な情報を声

津

で届けるテープ作りをしております。作った
テープは、ダビングして、利用者にお送りす
る。利用者はそれを聞かれたら返送して下さ
る。まあ、テープのキャッチボール。そんな
形でのお付き合いをさせて頂いております。

利用者は70人くらいで、テープの本数は1カ
月延べ300本ぐらいになります。それ以外に
ね、外部からの委託を受けておりまして、そ
のテープ作りもさせて頂いております。

以上がね、耳でのお付き合いなんです、そ
の他に、図書館での対面朗読や読書会、また
色々な催し、美術展やコンサートへのご案内
などね、じかに触れ合う機会も割合たくさん
あるんです。

ナレ 図書館のサービスの一つで、利用者の方が希

望される本を1対1で読む対面朗読は、色々な方と出会う機会でもあります。

津 朝起きたら、世の中が暗闇やっただってという方

がね、おられましたね。もう何かすっごい落ち込んでおられて、そういう方がね、図書館

で対面朗読をしてるっていうことをお知りになつて来られたんですよ。その方の悩み、

苦しみをね。「家族にそういう話をしたら、

家族も一緒に苦しんでるから、家族には自分の苦しみは言えない」とおっしゃるんですよ。

そやから、「ここでやったら、まあまあ聴いてもらえるから」っていうような感じですね。

何か対面朗読やのに、そういうことはのけて、

ただのお話だけなさるって、そういう場合も

ありましたね。ほいで、だんだんお話するう

ちに、ちよつとその何て言うんですか、気持ち

ちがほぐれてこられてね。何とか助かって頂きたいなと思いますものねえ。

ナレ 時には、利用者の方の心の支えになることも

あります。津さんが、この活動に参加されるきっかけは、どのようなことだったのでしょ

うか。

津 いやもうねえ、今から20数年前になりますけ

どね、生活環境がガラッと変わったんですよ。

主人の父と主人をね、相次いで見送りましてね。今まで時間に追いかけられた生活し

てたんですけど、急に時間が余ったんですよ。

やっぱりね、その時間の余りというのが何か索
漠としたね、虚しさの広がるね、時間だった
んですよ。その中で私自身の中の助かりを求
めていた頃ね、ふと目にとまったのが、市の
広報に掲載されていた、朗読ボランティア養
成講座だったんですよ。それでその講座を
受けるようになったんです。

ナレ 朗読し、テープに吹き込む地道な作業は、津
さんにとって満ち足りた時間となり、新たな
生き甲斐を見つけたことができました。その
中で、今も心に残る出会いがあったと言いま
す。

津 ある方がね、やっぱり視力障害の方なんです
けど、はつきりもの言われる方なんですけど、

「あんたらがボランティアできるのは、私ら
がおるからやで」って言われたことがあるん
ですよ。真にその通りだと思ひましてね。

そやから、人はやっぱり、皆さんそれぞれ、
お互いに助け合って生きているんだなあつて
いうことを良く分らせてもらいました。そ
やからこちらが一方的に与えているのではな
くて、相手の方からもたくさんのものをちよ
うだいしているという感謝の気持ち、それを
いつも持っていたいなあと思っんですけど。
ほんとに自然にサポートできるようになりた
いですね。

ナレ 代々、金光教の信心をする家庭で育ち、ご自
身も信心を受け継ぎ教会にお参りしています

津さんは、この活動との出会いにも、神様のお働きがあったのではないかと振り返ります。

津 何かあったんでしょうねえ。一生懸命お願いしてしたわけじゃないんですよ。ただ、たまに付いて、何となく藁（わら）をもつかむ気持ちで応募したんですけれど。それからですね、どんどん世界が変わっていきました。やっぱり神様がね、そうさせて下さったんだなということ、分かせてもらっております。ほんとにもういろんな出会いがあって、あのお…、いいですねえ（笑）。何かあのお…、ありがたいですね。

ナレ この活動を始めてから、利用者の方の無事を願うことが、毎日の祈りに加わりました。

津 私ねだいたい、慌て者なんですよ。走ってか

ら考える方なんですよ。今、教会のね、信心の目標がね、「何をすることも神様にお願いして」というのがあるんですよ。私、この実践目標「何をすることも神様にお願いして」というのをね、守りたいなと思ってるんです。走ってから考えるでしょ、そやからその前に神様をお願いして、でゆっくりと落ち着いて何でも物事したいんですよ。

津 音楽会に視力障害者の方をお誘いするんです

よ。それは招待して下さる、音楽の財団がありましてね。それに行く時はもう必ずひと月

前から「事故の無いように」ってお願いしますね。もう私、何にもできない、それだけはお願ひしますね。ほいでやっぱり、お願ひしといたら、やっぱりちよつと安心ですものね。

ナレ

出会った人たちの中には、他宗教の信仰を持った方もあり、自分だけが祈っているのではなく、自分も祈られているのだと感じたと言います。そして今日も、津さんは、マイクに向かい、多くの出会いに感謝し、楽しみながら、声を吹き込みます。

渡辺 尚美

おはようございます。渡辺尚美と申します。

私は、現在、フィリピンの「カンルンガン・サ・

エルマ」という民間の児童養護施設で活動しています。こちらでの生活も早7年が過ぎたものの、やはり、外国での暮らしという無意識の緊張感を持った生活は、想像以上に精神的な疲れをもたらすものです。

そんな疲れを取り除き、いつも私の心を穏やかにしてくれるのが神様への祈りです。

ここフィピンでは、祈りはごく自然なものです。

食事の時はもちろん、会議の前後や乗り物の中で、また、悩みを抱えている人がいれば、人目をばばかりことなく、その場で静かに祈りを捧げます。同時に、祈りは人への優しさとして現されるのでしょうか。困っている人にさつと手を差し伸べたり、当然のように席を譲る姿などは、よく見かけるものです。

しかし、このような社会でも、悲しい事件は絶えません。特に、子どもが犠牲となり、助けを求めてやって来るのが、現在、私が活動しているような施設です。多くは親たちに仕事がなく、子どもが労働を強いられたり、人身売買の犠牲となるケース、アルコールや薬物中毒に陥った養育者による虐待など、心身ともに深く傷ついた子どもたちが保護されています。また、虐待から逃れるため路上に飛び出

し、いわゆるストリートチルドレンとして保護されたケースもあります。

私たちの施設では、衣食住の整った安心で健康的な生活や教育を提供するとともに、カウンセリングや家庭訪問などを行い、心のケアと問題解決に努めながら、養育者との関係修復に日々励んでいます。

私自身は、子どもたちへの異文化教育の他、日本の方々へ状況を知って頂くためのスタディーツアーの実施、運営資金の協力を求める活動などを担当しています。

かつて、「子どもは真っ白なキャンバス」と表現した学生ボランティアがいました。その言葉を借りるなら、施設にやって来る子どもたちは「真っ黒なキャンバス」でしょう。大人や社会の事情により、彼ら

が選ばない色を塗りたくられたキャンバス。子ども自身が自ら選んだ色に塗り直す作業に、手を差し伸べていくのが私たちの仕事であり、ここには神様の働きが不可欠となります。

私は金光教を信仰していますが、フィリピンの人々の多くはキリスト教を信仰しています。しかし、子どもたちの幸せを祈る心に違いはなく、神様と子どもたちが出会うことは、とても大切なことだと感じています。

施設にリサという13歳の女の子がいます。リサと彼女の母親は、路上で倒れているところを保護されましたが、母親は間もなく亡くなりました。餓死でした。しかし、自分の空腹は抑えてでも、育ち盛りの我が子には食べさせていたのでしょう。リサはい

たって健康でした。

その後、身寄りのないリサは施設で生活することになりましたが、早速、本来の気の強さを発揮。当時は誰彼ともなく、よくケンカしていたものでした。

ところが、彼女には一つ不思議なことがあります。施設に来て以来、服を着替えようとしませんでした。フリルの付いた白いワンピース。かなり汚れが目立ってきて、着替えるように言っても、そのままです。

実は、そのワンピースこそ、彼女と母親を繋ぐ唯一の持ち物だったのです。その年の誕生日に母親が買ってくれたのです。幼かったリサには、まだ、死というものが何を意味しているのか、うまく理解できなかったのでしょうか。いつも一緒にいてくれた

母親の温もりを恋しがるように、ワンピースを着続けていました。

そんなある日のことです。お祈りの最中、それで元気に歌い踊っていたリサが、突然、座り込み、顔を埋めて動かなくなりました。お祈りの後、そつと近づいて抱きしめると、抑えきれなくなったのか声を上げて泣き出しました。

その時、彼女は悟ったのです。あの日、母親は自分の隣でただ眠っていた訳ではないということ。私は、神様がリサを包み込み、お話しして下さったのだと感じました。「リサ、良かったね。もう、一人じゃないよ、神様が『いつも一緒にだよ』って言って下さったんだね。よく頑張ったね…」。

リサを抱きしめながら、私も一緒に泣いていまし

た。

さまざまな経験を持つ子どもたちにとって、掛け替えのない存在としてこの世に生を授け、いつも幸せを願って下さる神様の存在を知る意味は大きいのです。深く傷ついた心の痛みを和らげるとともに、自らを再生させ、新たなステップを踏み出していく力となります。リサの場合、それは母親の死を受け入れることでした。母親以外の拠り所を知り得なかつた彼女にとって、神様は、自分を温かく見守り、支えてくれる大きな存在になりました。

今、リサは小学校に通っています。気の強さは相変わらずですが、仲間とむやみにケンカすることもなくなりました。そんな彼女に将来の夢を聞いてみました。

「夢は2つあるの。施設のスタッフ。それから、

お医者さんにもなりたい」と、迷いのない目で答えるリサ。いずれの夢も、彼女が過ごしてきた憂いの日々の果てにようやく見つけたものです。

「でも、神様がかなえて下さるのは、一つだけだけどね」。そう続けると、大きな口を開けてうれしそうに笑いました。

今後も、神様が私を必要とされ、お遣い下さる限り、現在の活動を続けていくつもりです。私の祈りが子どもたちの心に届き、傷ついた心が少しでも元気になってくれることを願いながら…。

金光教放送センター

花本

父親がもっと子育てに参加して、主体性のある人間を作ろうということで、そのきっかけづくりをしているNPOの団体です。せっかくお父さんになったのに、お金は稼ぎますが、子育ては全く関心がない。教育はお母さんや学校、塾任せになっている。そういうお父さんをサポートしていく団体です。

花本

まあ父親がですね、まず子育てをする時にどういう風にして参画していくかということなのですが、我々が思っていることは、頭ごなしに子どもに指導したり、いろんなことを話したりしてもなかなか聞いてもらえない。子どもと同じ目線に立って、一緒

(爆発の実験の様子)

ナレ ここは、兵庫県のとある小学校。NPO法

人「父親サポート関西」の皆さんが、親子で学べる科学実験と題して、鉄やアルミの燃焼実験をしている様子です。

ナレ 奈良県に住む花本芳明さんは、この「父親

サポート関西」を仲間と共に立ち上げました。「父親サポート関西」とは、具体的にどのような活動をされている団体なのでしょうか。

に科学実験をして、その目を育てていこう

というふうにかけているわけです。机上で

物を考えるのではなくて、実験をして、そ

の結果を確認していくと、これは大人も子

どもも、同じ答えになるわけです。自然の

原理原則を学ぶんですね。そのコミュニケ

ーションができるようにしていくというの

が、科学実験の良さだという風に思ってい

ます。

ナレ

毎回さまざまな工夫を凝らして、科学実験

やおもちゃ作りをしています。今回の授業

では、空気とアルコールを使った爆発の実

験と紙で皿回し用のお皿を作ります。授業

を受けたばかりの子どもたちに、感想を聞

いてみました。

聞き手

このおもちゃ作ってみて、どうでしたか？

男の子

最初、回す時は難しかったけど、回せるよ
うになりました。

女の子

皿回しが楽しかったし、いろいろな実験を
しているのを見て、すごいと思った。

ナレ

近畿を中心とした各地の小学校を回る活動

の他にも、近年では公民館や老人ホームな

どの場所で、親子3代で学べる授業など、

活動のすそ野が広がっています。たくさん

の人たちと触れ合っていく中で、とても印

象に残った、ある親子の姿があったと言

います。

花本

科学実験が終わって、おもちゃ作りに入っ

たんですね。親子でおもちやを作ってたんですけども、4年生の子どもなんですけど、男の子、おもちやがうまく作れない。それで、お父さんも、もう一つうまく作れないということですね、だんだんだんだん時間がたつにつれて、みんなができてくるのに、その子どもはうまくできないから、泣き出したんですね。お父さんはなだめながら一生懸命に作ってたんですけども、子どもはどんどんどんどん大きな声で泣き出してダダをこねるようになったんです。それで、少し時間が経った時にですね、お父さんが怒ってますね、その子を殴りました。その時はみんな教室びっくりしたんですね。そ

花本

の内、放つとけないもんですから、スタッフがその親子と一緒におもちゃを作ったんですね。そしたら奇麗に作れて、子どもニコニコ顔で、お父さんと一緒に遊ぶようになったんですね。お父さんも家に帰ってもう一つ作りたいということで、我々にも一つ材料を下さいということで、持って帰りました。非常に印象に残ったのは、子どもがですね、ものすごく泣いてて、これは修復できないんじゃないかという風に思ってたんですけども、ちゃんとおもちゃができれば、お父さんと仲良く帰っていったという、後ろ姿が印象的でした。

ナレ

科学実験と、おもちゃ作りの場が、親子の

信頼関係を結ぶ、きっかけの場であって欲

しい。子どもの言葉や様子などを、親がま

ずしつかり受け止め、そして、理解し、お

互いの心を通わせることが、本当に大切な

ことである。子どもたちにとつての「お父

さん」は、とても大きな存在だということ

を、「お父さん」に少しでも感じ取つても

raitaito、花本さんは強く願っています。

ナレ

金光教には、「父母（ちちはは）も子ども

とともに生まれたり、育たねばならぬ、子

も父母（ちちはは）も」という歌がありま

す。子育てを支援していく活動の中で、花

本さんは、この歌をととても大切にしていま

花本

す。

やっぱ、妊娠した時からですね。自分の手

を離れる時まで、ずっと大事。それぞれ

の時期時期に必要なもんがあると思います

ね。第1子が誕生した時にですね、0歳で

すね。父親も母親も0歳やいふんです、そ

の時は。父親0歳、母親0歳。子どもが0

歳。子どもが15になった時は、父親も15歳、

母親15歳、父親業が15歳ということです

ね。子どもは確実に成長していきます。で

も父親業としてね、こう成長していつてる

かと言うたらなかなか、そうはいかないん

ですね。でもやっぱり、それぞれにその時

代時代に必要なことがあるから、成長して

いかなんないかんのやなっていう風に思ってます。子どもはですね、やっぱりいろんな所ですみずくんですね。大きな壁にぶち当たります。その時にですね、お父さんお母さんに相談できればいいなど。そういう風な一つの、戻るところがあればね、ふるさとのようなところがあれば一番良いなと思ってます。

ナレ

現代社会において、親の子育て放棄など、深刻な問題が後を絶ちません。花本さんは、子どもたちのどんな小さなサインであつても気付いてあげて欲しい、そしてその子どもたちにとってのスーパーヒーローであるお父さん、お母さんの温かい愛情で大きく

包み込んであげて欲しいと、切に願っています。子どもと同じ目線に立って共に生きていく。そんな親子が一組でも多くなるように、今日も花本さんの活動は続きます。

関口 昭子

「もし、地震や火事になったら、私に構わず、あなた一人で逃げなさい」。

20年前、手足の関節をリウマチに冒され、一人では身動きできなくなった叔母の、何気ない言葉でした。

その時、私は、何を唐突に叔母が言い出したかと、深く考えもせずを受け答えしていました。それから間もなく叔母は、後に残る私に切ない思いをさせないように、全てに気配りをして他界しました。私にとっては母親代わりの叔母でした。

私の母は太平洋戦争の始まる昭和16年、それまでの心労が重なったためか体調を崩していました。何か胸にしこりがあるのを気にして、人の勧めもあり、検査を受けました。即、乳ガンを宣告され、直ちに手術。しかし、かなり進行していたガンは時を待たず、リンパ節を伝わり転移。もちろん当時のことで抗ガン剤はありません。本人も家族もガンの宣告は、死と受け止めたことでしょう。

しかし、当時10歳の私には母親が死の病と闘っているなど見当もつきませんでした。

そんな時、日本はアメリカやイギリスと戦争を始めました。帝国日本は負けないと、私たち小学生も、お国のために役に立とうと励みました。

そして、昭和17年4月18日。東京の上空にアメリカ

力の爆撃機が襲来し、爆弾を投下していきました。

これが、東京空襲の第一歩でした。

当時、食糧は既に配給制度となっていました。その日、私は配給の卵をザルに入れて家に帰る途中、空襲のサイレンを聞きます。思わず見上げた空に一機の飛行機が見えましたが、それがこの爆撃機かどうかは分かりません。ただ、ボーツと空を見上げていたように思います。

そして、その時を境に私たちの生活は一挙に様変わりしてゆきます。

町内近隣同士の結束。隣組という組織の下に空襲に備えての訓練。バケツリレーの水で火を消す。果ては竹槍で人を刺す練習が毎日のように行われました。

一方、我が家では手術後の母を、祖母、曾祖母、

そして叔母の3人が交替で看病しました。その間を縫うように隣組の責任者となった祖母は、出征兵士を送る指揮を執ったり、だんだん少なくなる男たちに代わって隣組の仕事も増え忙しくなりました。「病人がいるから」など口実にもなりません。そういう中で、母は昭和17年8月、37歳の若さで亡くなりました。その時、76歳の曾祖母は「私が代わってやりたかった」と泣きました。

その曾祖母も翌年9月、3日間床に着いたきりで、この世を去りました。

「親より先に死ぬ親不孝」と言われる程、祖母にとつて、37歳の母の死は、辛く悲しい野辺送りだったと思います。しかし、11歳の私にはそんな祖母の

胸のうちを計ることさえできず、ただ悲しみに打ちひしがれていました。そんな私に、一緒に泣きたかったはずの祖母は「泣いたってお母さんは帰っては来ない！」と私をしかったです。

いつ襲ってくるかも知れない空襲に備えて、東京の空の下で私たちはおびえながら暮らす毎日でした。そんな中でも、悲しいけれど2人の葬儀は無事に、しめやかにそれぞれさせていただくことができました。

やがて、人が亡くなっても葬儀をすることなどできなくなる時が、すぐ目の前まで来ていたのです。

昭和19年後半から20年になると、連日連夜といえる程の空襲に見舞われ、特に昭和20年3月10日の東京下町の空襲は、この戦争にとどめを刺すほどの

大規模なものでした。それでも戦争は続けられました。

遠く沖縄ではもともっと悲惨な事態が繰り広げられていました。そしてついに世界で初めて原子爆弾が広島、長崎に投下され、ようやく戦争が終わりました。

もうそのころは死者を丁重に弔うなど考えもつかない日々でした。つい今まで一緒に居た家族が、その生死すら確かめられず、黒こげの遺体を見てもこの誰かも分からず…。そんな悲劇がたくさんこの戦争によってもたらされたのです。

父親を病で亡くした友人は「遺体を納めるお棺が無くて、やむを得ず天井板をはずしてお棺にした」と、うつろな目で語りました。

もし母が、あの空襲激しい中、病の身で横たわっていたならば、きっと、叔母が私に言ったように「私を置いて逃げて」と叫んだでしょう。

あの時、母は、親よりも先に死ぬことは親不孝だと世間の人たちから言われたかも知れないけれど、母にとっては悲しい最後の親孝行だったのではないかと、私は思うのです。

病んでいる娘に「私を置いて逃げて」と言われ、そして我が子の葬儀すらできずにいたならば、祖母は親としてどんなにか嘆き、悲しんだことでしょう。

このような体験をした人はきつとたくさんいたに違いありません。誰もがそんな体験はしたくはないし、この地上に住むすべての人々にさせたくありません。

だから私は、いえ私たちは「戦争の被害者にも、加害者にもなりたくはありません。絶対に！」と、亡くなられた人たちとともに叫びます。

金光教には「人が人を助けるのが人間である」という教えがありますが、人間だからこそ人を助けることができるのです。その本来あるべき人間の姿を取り戻すことが何よりも大切だと思うのです。

金光教放送センター

《登場人物》

ぼく（胎内の赤ちゃん）

母親（20代）

父親（20代）

医師（女性）

ぼく ぼくは目覚めた。うーん、温かくていい気

持ち、ぼくはふわふわと漂っている。ここ

はママのお腹の中だ。ところが、外では…。

（カチャカチャ、食器の触れ合う音）

父親 ごちそうさま。あれ、君あんまり食べないん

だね。

母親 うん。何だか自分の作った物って、食欲無く

て。ねえ、今度の日曜日、久しぶりに外でラ

ンチでもしない？

父親 あ、悪い悪い、ゴルフなんだ。

母親 またなのー。

父親 仕方無いだろ。上司の付き合いゴルフ。課長

が始めたばかりで夢中でさ、ぼくが学生時

代ゴルフ部に居たからって、何かっていうと

ぼくのこと誘うんだよ。

母親 その話、聞き飽きた。

父親 だって、本当なんだぜ。

母親 ハイハイ…。(ため息) さ、片付けよ。

(ジャー、食器を洗い始める母親)

母親 いいなー、男の人はー。夜遅くにお酒を飲んで

帰って来るし、私なんか、パートが終わっ

たら、毎日毎日家に飛んで帰って夕食の支

度！ 遊びにいったこともない。

父親 嫌みか？

母親 この間の結婚記念日だって、あなた忘れてた

でしょ！

父親 会社が忙しかったんだよ。

(パリン！ 母親が洗うコップが割れる)

父親 コップに当たることないだろ。

母親 手が滑ったのよ。あーあ、子どもがいたらな

あ。そしたらあなたなんか要らない。

ぼく ぼく、ここにいるよ。

父親 子どもは神様からの授かりものだよ。

母親 こんなにケンカばかりしてたら、赤ちゃん

来ないかも。

ぼく ここに、ちゃんと居るって！

(ピイピイ、鳥の鳴き声)

父親 ああー良かった、ゴルフ日和だ。

母親 行つてらっしゃい。

父親 無理して起きてこなくなつていいって言った

のに。

母親 でも、…あ、ううっ…。

父親 どうしたんだい？

母親 気持悪くて、吐きそう。ちよつとトイレ…。

(トイレへ向かう母親)

父親 何か悪いもんでも食べたんじゃないのか？

じゃ、行ってくるよ。

ぼく ママは、お医者さんに行った。お医者さんの

声がした。「おめでたですよ、いいお母さん

になりましたよね」。やっとぼくのこと分か

ったみたい。ウッフ…。その夜。

父親 やった！ やったー！ バンザイ。

母親 まだ生まれてもいないのに。

父親 パート辞めろよな。

母親 まだ3カ月よ、働けるわ。

父親 えー、でも仕事中心つわりがひどくなったらど

うするんだ？ ぼくも、これからは、なるべ
く早く帰って手伝うよ。

ぼく 数カ月して、ぼくは気持ちが悪くなって、う

ーんと伸びをした。

母親 あ、赤ちゃんが動いた。

父親 本当？ ぼくにも触らせて。…えー、全然動

いてないよ。

母親 だって、さっき私のお腹けたもの。

父親 動かないって！

母親 怒らなくなっただけいいでしょう、確かに動いた

んだから。

ぼく え、またケンカ？ せっかくいい気持ちで寝

ようと思ってたのに。よーし、ママのお腹の

中で暴れてやれ。

母親 ほら。

父親 あ、動いてる動いてる。感動だなあ。あのね

え。

母親 え？

父親 いつかさあ、子どもが居たら、ぼくなんか要

らないって言ったろ。あれ本当？

母親 さあー、そんなこと、言ったっけ…？

ぼく そして、いよいよだ。

母親 痛っ！ 痛い…。あなた、あなたっ…。

父親 (寝ぼけ声で) どうした。

母親 生まれる…らしい。あ痛っ…。

父親 よ、よし、タクシー呼ぼう。

(電話のダイヤル音)

父親 ええ？ 今出払ってる？

(電話のダイヤル音)

父親 え？ こんな時間に車は出せない？

母親 うーん、痛い…。

父親 ぼく、外に行ってタクシー拾って来る。

母親 (うめきながら) こんな夜中にタクシー通る？

父親 任せろ！

(夜中、ちらほら聞こえる車の走行音)

父親 ああ、来ないなあ…。うーん、どうしよう…。

神様、助けて下さい…！

(間をおいて)

父親 …あ、来た！ あー、人が乗ってる。…おつ、

(オギャー！)

止まった。客が降りる！（大声で）運転手さ

父親 生まれた！ 生まれたあ！ 神様ありがとう

ーん！！

ございます。ママありがとう。坊や初めまし

父親 先生！ 出産に立ち合わせて下さい。

ありがとう！！

医師 奥さんはね、あなたのお子さんを生むために

命をかけて頑張っていらっしやるんですよ、

しつかり励まして上げて下さいね。

ぼく ママは、命をかけてる…？

(苦しそうな息づかいの母親)

父親 お、おい、苦しいか？ 背中なでてやろうか。

ぼく ママが苦しがつている。ぼくだって苦しいん

だよ。でも、パパはただおろおろしてるだけ

だ。ぼくとママは最後の力を振り絞った。

(無言で口ごもっているあきら)

父 ……何かあったんか？

金光放送センター

あきら あの…。

父 なんや。

《登場人物》

あきら ぼく、明日学校行ったら康平君を殴ろう

あきら (小学5年)

父 と思ってるんや。お父ちゃん、先生から呼び出されると思うで。けど、ぼくのこと

康平 怒らんといてな。

父 おー、穏やかやないな。一体どういう訳

(ガラガラ、玄関を開け閉めする音)

父 や？
あきら ぼくの誕生日にお父ちゃんに買うてもろ

あきら た自転車。
お父ちゃんお帰り。

父 目が真っ赤
あきら、どないしたんや？

つかやぞ、泣いてたんか？
事にしてくれてる奴やな？

あきら それをな、昨日学校帰りにここまで一緒に歩いて来た康平君が。

父 もう1日貸してくれ、やろ？

あきら

あきら (涙声で) 違うよ！

康平の声 ぼく、学校に忘れ物してしもた。取りに行きたいから、この自転車貸してえな。

康平の声 ああ、自転車、学校のそばのコンビニに置いてきてしもた。

あきら ぼく、ほんまは貸すの嫌やったんや。康平君とはそんなに仲ええことないし、そ

あきら 絶対に許せへん！ あいつ、ぼくとはそんなに仲良しやないし、ぼくの物はどう

やけど…。

なってもええと思てるんや！ 明日殴つてやる！

康平の声 すぐに返しに来るからええやん！

てやる！

あきら そう言うたから、断りきれへんかったんや。

父 気持ちは分かるけどなあ、暴力はいかん。もしかすると康平君は、ちよつと悪いことをして、あきら

父 とところが、返してくれへんかった。そうやる。

を引こうとしたんやないか？ 素直に「友達になつてよ」

やる。

と言えんから、そんなことをしたん

あきら うん、それで今日学校で康平君に聞いた

ら、何て言うたと思う？

ら、何て言うたと思う？

うか？

あきら　そやかて…、ぼくは…納得いかへん。

(学校のチャイムの音、学校の雰囲気)

あきら　いつ殴つてやる。朝からずーっとチャン

スを狙うてた。掃除当番が終わつたらや

つたらか。…あれ？　よう見てたら、あい

つずーつと一人ぼっちや。友達がないん

やるか…。

康平　(突然) あきら君。

あきら　あ、ええ、なんや？

康平　君の大事な自転車、ほつたらかした

のに、なんで黙ってるんや。先生に言い

つけへんのか？

あきら　それは…。自転車貸すのは嫌やて、はっ

あきら　(小声で)　なんでこんなこと言うてしも

きり言えへんかったぼくも悪いんや。

たんやる？　殴るつもりやったのに…。

ごめん、ほんまにごめん。

あきら　康平　もうええ。

康平　これ、自転車の鍵、返すわ。

あきら　うん。

康平　帰り、取りに行つてな。

父　そうかー。良かったやないか。

あきら　ぼく、今日担任の先生に呼ばれたんや。

前から康平君は、友達に物貸してもらて

は、捨ててしまったり、ほつたらかしたす

癖があつてんて。

父　　へえー。

あきら　そのたんびに相手の子とトラブルになっ

て、先生からお母さんに連絡が行くねん

て。そしたらお母さんは頭に来て、康平

君をアザができるほどきつう叩くんやつ

て。

父　　ふーん。

あきら　今度のこと、康平君、自分から先生のと

ころに行つて言うたんやて。

いことないのに、「ぼくも悪い」て言う

たんです。そんなことぼくに言うてくれ

るやつは、今まで誰もおらへんかった。

そやから今日は自分から報告に来まし

た。先生、今までごめんさい。

父　　康平君も勇気のある子やないか。

あきら　それでな。ぼく、お父ちゃんの言うたこ

とが当たってるんやないかて思たんや。

父　　ん？

康平の声　先生、ぼくがあきら君の大事な自転車を

ほったらかしにしたのに、あきら君は何

も言わへんかったし、仕返しもせえへん

かったんです。おまけにあいつは何も悪

あきら　言うたやろ。「友達になつてよ」と言え

んと、そんなことをする子がおるて。お

父ちゃんすごいなあ。

父　　フ、ハハ…。

あきら 康平君は今まで一人ぼっちで、寂しかったんかも知れんなあ。

あきら タケシー、ぼくらも入れてくれへんか

父 たんかも知れんなあ。

ー！ ほらー、手え振ってる。早よ行こ！

父 そうや。よう気がついた。偉いぞ。

康平 うん！

(草野球をする子ども達の歓声)

康平 (息を切らせながら) あきら君、そんなに早く走らんといて！

あきら あんなところで、タケシたちが野球やってる。

(カキーン、バツティングの音)

あきら あ！ 一朗がホームラン打った。すごい！

なあ康平君、ぼくらも一緒に仲間に入れてもらおうや。

康平 でもー…。

あきら かまへんかまへん、行こう。

(みんなが野球をしている所へ向かう二人)

金光教放送センター

修
んあ…。

父
勉強してるのかと思って見に来たら、また、

居眠りか！

修
さっきまで勉強してたよ。

父
弁解無用。こんな受験生が居るか！ しつ

かり勉強せい。

修
大丈夫だよ。今までだって勉強してたんだ

し、落ちるわけ無いって。自信あるよ。

父
お前の自信ほど当てにならないものはない。

油断大敵と言うだろう。ちゃんと勉強し

ろ！

修
ぼくはカレンダーを見る。高校の受験日ま

であと3日。取りあえず頭に鉢巻きをする。

「うん」これで気合いが入る。頑張るぞ！

修
ぼくが目指したのは、というより父親が命

令したのは、地元のレベルの高い歴史のあ

父
こらあ！

る高校だ。(間をおいて) 合格発表の日。

つ。

修 ぼく、中学浪人はしたくありません。

父 「…無い…、ぼくの番号が無い。まさか！」

父 当たり前だ。

修 と思った…、喜び合っている友達を横目に、

修 あのー、働きます。

父 行くあてもなく、仕方なく、とぼとぼと家

父 何を言うか！ 高校も行かずに働くなんて

に帰った。

許さん！

修 じゃあ…。

父 バカもん！ しつかり勉強しないからだ！

父 隣の市の高校を受験しろ、まだ間に合うだ

修 一番ショックを受けているのは、このぼく

ろう。あの高校は落ちこぼれの集まりみた

なのに、父は怒鳴る。誰のためにどなって

いな高校だが、まあ、…仕方ないか。

るんだろ。

父 は大学の先生をしている、その息子があ

修 (学校のチャイムの音)

の高校を落ちた…、父の見えかも…。ぼく

修 学校に通い始めたころ、「格好悪いなあ、

は一応頭を下げて嵐の通り過ぎるのを待

遠くだし、行きたくないなあ」という気持

ちでいっぱいだった。多分、授業態度にも

修
はい。

それが出ていたのだろう。昼休み、校庭で
ボンヤリしていると、担任の先生がそばに
来た。

教師
自分の気持ちの持ち方次第で願いは変わる
のよ、ほら。

教師
どう、学校に慣れた？

教師
ほらね。手にも表と裏があるように、裏が
出た時は、早く表になるように努力するの。

修
はい、まあ…。

教師
あなたの顔を見ると、何だかつまらな

そうな顔をしてる。

この高校に入って、良かったと思える3年
間にしましょうね。

修
別に、そんな…。

教師
高校生活って楽しいものよ。この高校でだ

修
そうだ、ここがぼくの居場所なのだ。落ち

って、いろんな人との出会いがあったり、
素晴らしいでき事に会おうかもしれないで
しょう。これからのそういうことを、大切
に、楽しみにしましょうね。

こぼれの学校と言われているが、他の高校
を不合格になってここに入学してきた生徒
たちがたくさんいる。みんな同じ痛みを味
わって来た者の集まりだ。ぼくと同じなの

だ。そう思ったら、気持ちが前向きになった。エリートには分からない、痛みの気持ち。

修 半年後。その父が脳こうそくで倒れた。母

もぼくもともうろたえたが、幸い軽くて済んだ。

父 修、学校はどうだ？

修 友達もたくさんできたし、楽しいよ。それ

に…。

修 (ガラガラ、父の病室のドアを開ける修)
父さん、具合どう？

父 何だ？

父 お前学校が遠いんだから、毎日見舞いに来

修 良い先生がいるんだよ。親身になって相談

くてもいい。

に乗ってくれるんだ。

修 だって、当たり前だろ、心配なんだから。

父 ほうー。最近お前の顔が穏やかになったな、

父 大したことはないんだ。お前だって帰って

結構結構。遅刻せずに行ってるようだし。

から宿題があるだろう？

修 父は父なりに、ぼくのことを心配してくれ

修 (かばんから勉強道具を出す修)

ていたんだ。

修 ぼくはここでやるよ。分からないことは、

父さんに聞ける。フフ…。

お前も…。

何？

父 高校受験に失敗して、かえって良かったの
かもしれん。

修 父も倒れてから、人の痛みが分かったのか
もしれない…。父の顔を見た。かすかにほ
ほ笑んでいた。

金光放送センター

《登場人物》

徹（高校3年）

あかね（徹の姉・大学4年）

父

徹　　ぼくは山村徹。高校3年生。どちらかと言

うとできが悪い。4歳年上の姉がいる。姉

は成績抜群で、現役で国立大学に合格した。

そしてぼくはというと、高校の担任の教師

が、運の悪いことに、かつての姉の担任の

教師だったのだ。だから、事あるごとに優

秀な姉と比較された。「なぜお前はそんな

んだ？　姉さんはあんなに優秀なのに」と

…。もういいよ、うんざりだ。腹が立って

くる。ぼくは山村徹ではなく、「できの良

い姉の弟」でしかなかった。こんなことば

かり言われると、余計勉強する気がなくな

る。そしてクラスの悪い仲間とつるんで、

「遊び感覚でコンビニで万引きをして、交番

まで連れて行かれたことがある。

（ふすまを明ける音）

あかね　（突然）徹！

徹　　何だよ、急に人の部屋に入ってきて、びっ

くりするじゃないか。声ぐらいかけろよ。

徹

姉貴は何でも一方的に決め付ける。こうな

あかね

徹、バイク欲しいってお父さんに言ったん

れば、意地だ。ぼくは親父の機嫌を取りま

だって？

くって、念願のバイクを手に入れた。ヤツ

徹

言ったよ。友達に乗ってるの、安く譲って

ター！

くれるって。オレさあー、前から欲しかっ

たんだー。

(徹が乗るバイクの走行音)

あかね

何考えてるの？ 徹はのんきね。もうじき

徹

いつもクラスの友達とバイクで走っている

1学期終わるってのに、どこの大学受ける

うちに、自然に友達が増えた。暴走族のよ

とか、進路決める時期でしょ。ふらふらし

うな奴もいた。ぼくたちは暴走行為が、自

てないで、勉強に集中しなさい。バイクは

分たちの存在を示す、唯一の手段だと思い

やめなさいよね！

込んでいたのだ。走っている時は姉とは比

徹 何でだよ。

較されない。風がぼくの体を巻いて後ろへ

あかね 危ないからよ、分かった？

流れる。早く、もつとスピードを上げて…。

(バイクのスピードを上げる徹)

(その後、警察に追われるようになる)

(ガシヤン、バイクごと転ぶ音)

徹 慌てふためいたばくはバイクごと転んで、

腕に擦り傷を作った。そして、捕まった。

最悪だ！

徹 鑑別所に移された。目の前が真っ暗になっ

た。「何でぼくが…」。家族はすぐに面会

に来てくれた。父とは二言三言話したが、

いつもおしゃべりな母は黙って目に涙を浮

かべ、姉貴はぼくと目も合わせない。

徹 それから1週間ほどして、姉貴が一人で面

会に来た。しばらくぼくの顔をにらみ付け

ていたが…。

あかね 徹、あんたお母さんの財布から、ちよくち

よくお金を抜いてたんだって。

徹 えっ？

あかね お母さんもお父さんも、とつくに知ってた

のよ。そのお金何に使ったの？

徹 別に…。

あかね そんな言い方って無いでしょう！ 家はそ

んなに裕福じゃないのよ。

徹 …分かってるよ。

あかね 私、お父さんに言ったの、徹に好き勝手に

やらせたらこの家はつぶれる。それでもい

いのって。

徹 …え。

あかね お父さん何て言ったと思う？

父の声 それでもいい。自分で気付いて立ち直って

ほしい。

あかね 私言ったの「その結果がこうなんでしょ」

(言い返せず無言のままの徹)

あかね そうしたらあのおとなしいお父さんが大き

な声で。

父の声 (怒鳴るように) 結果は出てないぞ！ あ

の子の結果はまだ出ていない！

あかね 私さあ、ぶ然としてたら、お母さんが、「お

父さんはね、毎日徹のことを思って、神様

にお参りしているのよ」って。そんなに徹

のこと思ってくれてたなんて知ってた？

徹 「結果は出ていない」。父の言葉を噛みし

めて、ぼくは素直な心になって面接官と話

をし、2週間で鑑別所を出られることにな

った。

あかね ええ？ あのバイク売るの？

徹 うん、そして学校に行って先生に謝る。

あかね 本当なら自主退学でしょう？ よし、私が

付いて行ってあげる。

徹 いいよー、子どもじゃあるまいし。

あかね 違うわ、私が先生に会いたいだけ。

(学校の雰囲気)

徹 学校でぼくはひたすら先生に謝り、真面目

徹

になりますと誓い、先生は久しぶりに優秀な姉貴と会ったことで喜び、ぼくは何とか退学にならずに済んだ。先生は「人生には必ず転機というものがある、これを生かすも殺すもお前次第だ、お前は今その転機にいる、よく考える。…そうだなあー、夏休みが後2週間ある。何か有意義なことをして、レポートにして出さない」と言った。

ぼくは考えて、老人ホームにボランティアに行くことにした。ぼくが若いというだけで、お年寄りから歓迎された。手の不自由なお婆さんの塗り絵を手伝った。「あなた上手ね」と褒めてくれた。生まれて初めて

徹

人に褒められたような気がする。ぼくは素直にうれしかった。
そうだ！ 高校を出たら福祉の専門学校に行こう。

金光教放送センター

幸子 私、前からバイトしたかったの。

母 でも…、お父さんが良いって言ったらね。

幸子 やった。

母 まだ良いって言ってないのに…。一体何をやるの？

幸子 駅前のハンバーガーショップ。アルバイト募

集の張り紙がしてあったの。

幸子（大学生）

母

（ミンミン、セミの鳴く音）

幸子 お母さん、友達がアルバイトしてるんだって。

私も夏休みの間だけアルバイトしてもいいで

しょう。

母 まあ、ねえ。幸子もやっと大学生になったこ

とだし。

（ガチャ、ドアの音）

幸子 ただいまー。

母 仕事どうだった？

幸子 うん、店長さんの言うことを聞いて一生懸命

仕事をした。ドキドキの連続。

母 どんなこと？

幸子 今はね、裏方。食品を冷蔵庫から出して、焼

いたり揚げたり。マニュアルがすっかり決ま

ってるの。だから店長と主任さん以外は全部

バイトの人、へへっ、先輩とも仲良くなれた

よ。私にしたら結構重労働かな…？

母 そう、まあ社会に出て良い経験ができたわね。

(ガチャ、ドアの音)

幸子 (元氣無く) ただいまあ…。

母 お帰りなさい。どうしたの？ 元氣無いわね。

バイト始めて2週間なのに、そんなに疲れる

の？

幸子 別に…。

母 心配してるのよ。

幸子 …あのね、先輩から、何だか距離を置かれて

るの。

母 どうして？

幸子 分らない、でもあと2週間ほどだから、我

慢して続ける。

(ガチャ、ドアの音)

母 あら幸子、こんなに早く。

幸子 (泣きながら) 私、バイト辞めたい。

母 どうして？

幸子 先輩に店の裏に呼び出されて「あんたが良い

子ぶって仕事するから、店長の私たちへの風

当たりが強くなる」って言われたの。だから

私が「あなたたちがちゃんと仕事をしないか

ら、私が頑張ってるんじゃないですか」って、それから大ゲンカになって、びっくりして出てきた店長に「今日はもう帰りなさい」って言われた。私、真面目に仕事してるのに、何であんなこと言われなきゃいけないの？ 絶対におかしい！

母 そうね、だけど…。

幸子 マニユアルの最後にね、「お客様に喜んでもらえるように創意工夫をしましょう」って書いてあるのよ。マニユアル以上のことをしたから責められるなんて、もう最低！

母 でも、いい体験をさせてもらったわね。

私も昔、そんなことがあったわ。

幸子 え、どういうこと？

母 誰でも嫌なことを経験するから成長するんじゃないかなあ。自分は正しい、間違ってるのは相手なんだと思っても、でもあの人はどうしてあんなことを言うんだろうって、考えることも大切なよ。

幸子 だって、私は悪くない！

母 もっと、その先輩と話し合ったら…？

幸子 嫌だ！ 顔も見たくない。

母 ふふふ…。

幸子 何で笑うの！

母 幸子はまだまだ子どもね。

幸子 お母さんは見てないから…。

母 そうじゃなくて、たとえ幸子が正しくても、

幸子もケンカした子も、お互いが自分の考え

を相手に押し付けたわけでしょ。お互い様じゃないの？

母 あらー、ありがとう。(食べながら) これ、

幸子 理屈ではね…。

幸子 おいしいわ。幸子が生まれて初めて頂いたお給料でのプレゼントだから、余計おいしいのかしら。

母 幸子ねえ、自分を抑えるってことも考えなき

幸子 えへへ。私、これを売りまくったの。もう、

やね。そうしたらケンカしたりしないで、ちゃんとそのことに向き合っていけるのよ。

見たくもない。

幸子 そんなの、しんどい。

(お互い笑い合う二人)

母 しんどいのを我慢するから、人間が大きくな

るのよ。あとちよつとよ、頑張りなさい。私も応援してるわ。

(ルルルルル、電話が鳴る音)

も応援してるわ。

幸子 はい、そうです。あ…、え、去年の？ ごぶ

(ガチャ、ドアの音)

さたしてます。あ、はい。…はい、分かりました。

幸子 お母さん、バイト無事に終わりました。はい、

母 電話、誰から？

これお店のハンバーガー。

幸子 去年の夏休みバイトしてたお店の、店長さん。

母 ああ、ハンバーガーショップの？

幸子 今年の夏休みも来てくれないかって。夏休みになったら、友達と旅行に行こうかって話してたのに…。

母 どうするの？

幸子 私…、バイトに行く。だって、ぜひ来て欲しいって言われたの。それに、お客さんへの君の笑顔がとっても良いって。

母 (笑いながら) フッフ、あらまあ…。

母 今年はどうなの？

幸子 今日ね、新しく入った若い子がね、お客さんにどなられて控え室で「もうこんなバイト辞める」って大変だったの。

母 まあまあ、去年の幸子と同じね。

幸子 私、その子と一緒に帰って来たんだけど、「去年私も辞めようと思ったのよ」なんて話してて、お母さんが言ってくれた言葉を思い出したの。

母 へえー。

幸子 ほら「嫌なことを経験するから人間は成長するんだ」って。そうしたらその子ちよつと元気になって。「幸子さんのお母さんってすごいですね」って褒めてくれたの。

母 へえー、私のこと褒めてくれたの。うれしいなあー。

(笑い会う二人)

金光放送センター

《登場人物》

中村幸雄（26歳）

校長先生（田代）

ミドリ（小学3年）

ふさえ（ミドリの祖母）

（ポーポー、連絡船の汽笛）

幸雄

ぼくは連絡船で瀬戸内海にある小さな小島に向かっている。ほんまはこんな島の

小学校に転勤するのは嫌やったんや。け

幸雄

ど、新卒で張り切って都会の小学校の教師をしていた時、散々な目に会った。いわゆるモンスター・ペアレントと言う奴や。運動会でぼくが「気をつけ！」と言ううたら、「軍隊みたいな教育をするな」と言われ、「この写真、どうしてうちの子どもが中央に写ってへんのですか！」と怒鳴り込む。ぼくはノイローゼになり、円形脱毛症にもなった。見るにみかねた校長先生が、この転勤の話を持ち出したのだ。

あ、船着き場で白髪の男性がこっちに手振っている。僕にやるか？

(船が港に到着)

校長 やあー、中村先生。お待ちしとりました。

校長 学校は、全生徒26名。

私が校長の田代です。

幸雄 全校で、ですか？

幸雄 あ、初めまして。ええ、ぼくが中村やってこと…？

校長 はい。

てこと…？

校長 ハハ…。あの船に乗つとるのは、皆この島の者ばかりですよ。さ、アパートに

幸雄 思わず校長先生の顔を見た。澄ましている。前の学校は全校で700人やった。きっと校舎も木造でボロボロなんやろなあ…。

ご案内しましょう。ここの船着場が、この島の中心部みたいなもんです。

校長 中村先生は…。

の島の中心部みたいなもんです。

幸雄 あ、はい。

校長 自炊生活ははったことありますか？

幸雄 見渡すと、小さなスーパーと商店が数軒

あるだけや。えらい所に来てしもた…。

幸雄 いいえ、今までずっと両親と一緒にでしたから。

校長 そりやそりや…。まあ、何とかあります

(スタスタ、二人の足音。チイチイ、鳥の鳴き声)

やろ。

幸雄

何とか、なんてなる訳ないやないか…。

幸雄

「誰ぞに聞く」て、ここに来るまで猫の子1匹会わへんかったやないか。アパートに入ってみると、思ってたより奇麗や、

今まで「うるさい親や」と思ってた自分を反省。

新しい。窓を開ける。アパートが高台にあるので、青い海が一望のもとや、景色だけは超ラッキーやと思てたら、腹がグーッと鳴った。米だけは母親が持たせてくれたけど、まさか、米だけというのは…。まあ、船着場に行ったら何かあるやろ。

校長

ここが、先生のアパート。学校は、えー

と地図、この紙に書いときましたから、

ここから歩いて10分ほどです。

幸雄

ああ、はい分かるでしょうか？

校長

はいはい。そのほかに建物は何もありませんから。分からへんかったら、誰ぞに

聞いて下さい。ほいじゃ、明日が2学期

の始業式ですからよろしく。

(コンコン、ドアをノックする音)

幸雄

ああ、ありがとうございます。

幸雄

はい。

(ガチャ、ドアを開ける音)

幸雄 えーと、どなた？

ミドリ この、前の坂道下りたところです。

ミドリ 先生こんにちは。今度来はった先生でし

幸雄 こうしてぼくの島での生活が始まった。

よ。さつき家の前を校長先生と通らはつ

たから。

幸雄 そうやけど。

ミドリ 石田ミドリといます、3年生です。

幸雄 1年生と2年生はそのプリントの計算問

うちはこの子の祖母でございます。先生

の晩ご飯、あらへんやろ思て、お弁当作

って持って来ましたわ。

幸雄 えーっ、それは感激やなあ、ありがとう

ございます。

ミドリ ほな、先生明日ー。そうや、うちが迎え

幸雄 子どもたちは皆素直で可愛い。土地の人

に来ましょか？

「先生ちよつ

たちは道を歩いていると、「先生ちよつ

とちよつ」と呼び止めて野菜をくれる。

幸雄

学校の用務員さんは、魚釣りに誘ってくれた。ぼくはこの島が大好きになった、

そして心から神様に感謝した。田舎やか

ら嫌やと思てた自分がとても恥ずかしい。

幸雄

取りあえず船着場で買い物をしての帰り。

(激しい雨風の音)

幸雄

わあー、急にえらい風や！ 歩くのもやつとやな、これは…。ここは…ミドリちゃんの家や。えらい古い家やけど大丈夫やろかなあ。

校長

先生、先生。

幸雄

あ、校長先生。

校長

ニュースで夕方から大きな台風がくる言うてましたが。

(ドンドン、戸を叩く音)

ミドリ

先生！

幸雄

ええ？

幸雄

ミドリちゃん、お婆さんも、ぼくのアパートに避難しよう。カップか何かありませんか！

校長

懐中電灯にラジオを用意して。ねっ停電になると断水になりますから、風呂に水をためておかれたらええと思います。

ふさえ

へえ、おおきに。

幸雄

ああ、お婆さん、ぼく背負うたげるわ。

一人やったら風に飛ばされてしまうわ。

ミドリちゃんも、しつかりぼくの手を握

ってや。

ミドリ

はい。

ふさえ

おおきにおおきに、先生は神様みたいや。

幸雄

違う違う。ぼくを育ててくれたのは、こ

の島の人たちだ。そう言うたが、声が風

で吹き飛ばされた。

(ファミレスの雰囲気)

金光教放送センター

健一 おう、夏美ちゃん待たせたな。

夏美 ごめんね休みの日に。

健一 そうだよ、家族サービスを犠牲にして君のところに来てやったんだ。

夏美 だから、ごめん。

健一 (夏美の従兄弟・36歳)
ファミレスの店員
健一 はは、いやいや。逃げ出す口実ができて良かった。

夏美 えっ、結婚すると、そうなるの？

夏美 私は仕事の休みの日曜日に、いとこの健ちゃん

んをファミレスに呼び出した。年は10歳も離

店員 はい。

れているが、昔から仲良しだ。私のことを妹

夏美 嫌あねえ、笑ってごまかして。

みたいにいる。

健一 夏美ちゃんの相談事って、もしかして結婚す

るのか？

夏美 どうしようかって、迷ってるの。

健一 何を迷ってる？

夏美 好き、イコール結婚なの？

健一 まあ、普通そうなんじゃないのか。相手はどんな人？

夏美 誠実で優しい人。私にはもったいないくらい。

店員 お待たせしました。

(コーヒーをテーブルに置く店員)

健一 あ、ありがと。で、夏美ちゃんは結局のろけに来たのか？

夏美 違うわ。あのね、今が結婚するタイミングなんだろうか、とか。この人は一生私を裏切らないという保証はあるだろうか、とか。私はこの人を幸せにしてあげられるだろうか、と

か。

健一 おいおい、どうしてそんな先のことを勝手に

想像するの？

夏美 だって、彼が大好きだから、すごく好きだから、先のことごとくも不安で、どんどん考え

方が悪い方へ行くの。

健一 うん。「明日塩辛を食べるからといって、今

日から水を飲んで待つわけにはいくまい。取り越し苦労をするな」っていう教訓があるんだよ。まさにそれだね。

夏美 じゃあ、どうしたらいいの？

健一 ぼくに聞かれてもねえ…、会ったこともない人だし、仮に知っている人だとしても、やっぱり先のことは分からないとしか言えない

よ。

夏美 そう…。

健一 人生にはねえ、幸せへのルートを示す地図は無いんだよ。それはね、幸せの形は一つじゃ無いからだとぼくは思うんだ。100人居れば100通りの幸せがある。

夏美 それは、確かにそうだけど。じゃあ健ちゃんの家はケンカなんかしないの？

健一 するよ派手に。

夏美 えー…？

健一 意見が違えば、言い合いしなきゃならないことだってあるだろ。

夏美 そうだけど…。

健一 ぼくは、言いすぎたと思ったら、2、3日し

てから謝ってる。

夏美 へえー、そうなんだ…！

健一 あのさ、一緒に喜んだり悲しんだり、それが夫婦ってもんだろ？

夏美 そうかもしれないけど…。

健一 夏美ちゃんが彼を大好きで、どんなことがあっても彼を幸せにしてあげたいと思うんなら、もう答えは出てる。

夏美 え？

健一 2人で地図の無い道を歩いてもいいと思ってるんなら…。

夏美 地図の無い道？

健一 そうだよ、人生には地図は無い。一緒に歩けるか、それが答えだ。よく考えてごらん。

健一 (間をおいて) ところで、プロポーズはされたの？

たの？

いか、迷うことは無いんだよ。迷ってる間に10年たっちまう、ハハハ…。

夏美 まだ。

健一 はあ、それなのに心配してるのか。全く取り越し苦労する奴だな。さつさとプロポーズされて、結婚しちまえ。ぼくなんて仏滅の日に結婚式やったんだよ。

結婚式やったんだよ。

夏美 ひと月後にとんでもないことが起きた。私はまた健ちゃんを呼び出した。

そうだったっけ？

(ファミレスの雰囲気)

健一 その日しか式場が空いてなかったんだよ。何カ月も待っていられなかったんだ。

健一 夏美ちゃん、今日は結婚式の報告か？

夏美 あ、思い出した！

夏美 あのね…あのね(泣き出す)

そう、そうだよ、嫁さんのお腹の中に子どもがいたし、早く結婚したかったんだ。おかげでボクたちだけで結婚式場を独占できた。い

健一 え？ 何でまた…。

夏美 そう、そうだよ、嫁さんのお腹の中に子どもがいたし、早く結婚したかったんだ。おかげでボクたちだけで結婚式場を独占できた。い

健一 え？ あっちょっと、おい、泣くのは止めるよ。皆がじろじろこつちを見る。

夏美 彼ね、北海道に行っっちゃったの。

夏美 彼ね、北海道に行っっちゃったの。

夏美 彼ね、北海道に行っっちゃったの。

夏美 彼ね、北海道に行っっちゃったの。

健一 どうして？

夏美 彼のお母さんが急に脳こうそくで倒れて、彼

は一人っ子でお父さんはもう居ないの、だから…。

健一 いずれ帰って来るんだろ。

夏美 ううん、仕事辞めて、北海道に帰っちゃったの。

健一 仕事って？

夏美 介護福祉士。

健一 ああ、なるほど…、仕事を親の介護に生かすって訳だ。で、夏美ちゃんはそれをポーツと見送ったって訳か？

夏美 仕方ないでしょ。

健一 彼は、そういう状態で結婚するのは、君が可

哀想だと思ったんだよ。しかし、夏美ちゃんはバカだなあ。

夏美 どうして？

健一 本当に好きなら、ぼくだったら北海道まで追いかけて行くよ。夏美ちゃんの仕事は薬剤師だろ、どこでだって就職できるじゃないか。

夏美 …うん。

健一 そして、君からプロポーズするんだよ。

(ゴーツ、飛行機の離陸音)

夏美 私は飛行機の中でプロポーズの言葉を考えた。何て言ったらいいだろう…。「人って文字は、2本の線が重なり合って一つの文字になってるの、私はあなたの支えになりたい」

「私にお母さんのお世話をさせて、だって私の大好きなあなたを生んでくれた人だもの」。
んー、どれもイマイチだなー。私はしゃれた言葉を、あれこれ考え続けた。

夏美
空港で彼の姿が見えた。手を振っている。私

は走った、そして彼の胸に飛び込んで言った。

夏美
結婚しよう！

金光放送センター

《登場人物》

私（山本・33歳）

主婦（木下・35歳・マンションの上階の住人）

私　私は33歳。夫と2人賃貸のマンションに住んで

いる。職業は小学校の教師。今日は土曜日、

料理の腕を振るっている…。

（ピンポン、チャイムの音）

私　はい。

（ガチャ、ドアを開ける音）

主婦　ごめん下さい。私この上の階に引っ越して来

ました木下と申します。3歳と6歳の男の子

が居て、うるさくて、ご迷惑をおかけするこ

とがあるかもしれませんので、ちよつとごあ

いさつに。

私　それはご丁寧に。

主婦　山本さんは、お子さんは？

私　…は？　家の名前…。

主婦　だって表札見て。

私　ああ。…子どもは、いません。

主婦　あら新婚さん？

私　え、いえ。

主婦　もしかお子さんいらしたら、うちの子のお友

達になつてもらおうかと…。

私　こちらこそよろしく。

私　私は子どものことを聞かれるのが苦痛なのだ。結婚して6年、何度「赤ちゃんはまだ？」

と言われたことか。子どもが欲しい！ それ

は切実な願いなのだ。病院で調べてもらおう

と出かけたことがある。病院の前まで行って

足がすくんだ、私のせいだと言われたらどう

しよう…。私は回れ右をして帰って来た。し

かしあの木下という、引越して来た人の言

葉がきっかけになった。絶対に医者に行こう

と心に決めた。

(病院の雰囲気)

私　近くの病院は、近所の人に会うのが嫌なので、

わざわざ遠くの総合病院まで出かけた。産婦

人科の受付はどこかときよろきよろしていた

ら…。

主婦　(突然) 山本さん。

私　(びっくり) えっ！ 木下さん…！！

主婦　どこか、お悪いの？

私　え、…いいえ。

主婦　だって。

私　…木下さんは？

主婦　私、友達のお見舞い。

私　私も。

主婦　あーら、終わったの？

私 ええ。

主婦 じゃあ、そこらでお茶しない？

(喫茶店の雰囲気)

主婦 山本さん小学校の先生ですって？

私 なぜご存じなの？

主婦 誰かに聞いたの。私なんて男の子2人で、も

う毎日大変。洗濯機は日に何度も回さなきゃ

ならないし、家の中はぐちゃぐちゃだし、私

の時間なんて全然無いの…。

(主婦の言葉に被さるように)

私 私はグチを延々と聞かされる羽目になった。

子育てが大変って、私はその大変な子育てを

やりたいのだ！「あなたたちが居てくれるか

ら私は幸せなのよ」って子どもたちに言って

あげればいいのに…。それから今度は近所の

噂話に展開した。昔はこういう人を放送局と

言ったらしい、今じゃあさしずめパソコンや

携帯のネットかなあ…。

私 しばらくして、胃の調子が悪くなった、私は

病院に行った。「多分おめでたですよ。産科

に行って下さい」。ヤッター、ついに子ども

ができた。私は夫とともに喜んだ。

私 ところが、次の検診で「流産の危険がありま

す」と先生に言われた。私は仕事を辞め、ひ

たすら無事に子どもが生まれますようにと祈

った。

主婦

あんなに待ってたのに、赤ちゃん残念だったわねー。

私

(びっくり) ええっ! どうして…?

主婦

先生も辞めちゃったんだって? 家にばかり引きこもっているの良くないわ。あのね404号室の人が、お子さんが不登校になって困っているから、勉強、誰かに見て欲しいって言ってたわ。山本さん見てあげたらどう?

私

たまにはネット夫人も良いことを言う。私は家で「不登校の子どものための教室」を始めた。ロコミで子どもが数人に増えた。(間をおいて) この子たちはかけがえのない命を今生き

ている。私は失った赤ちゃんのことを思い、

この子たちの一人ひとりがとてもいとおしく大切に思えた。

私

それから2年たった。赤ちゃんができた! また流産しないかと、うれしさの中に不安が入り混じる日々を過ごす。

主婦

(スーパーの雰囲気)

山本さん!

私

振り返ってびっくりした、そこには私と同じ位のお腹をした、ネット夫人が居た。

主婦

山本さん、もう6カ月位? 私もよ。あははは…、もう大丈夫、少しは運動もしなきゃ。

分からないことがあったら私に聞いて。

私

私は初めてネット夫人を頼もしく思った。

金光教放送センター

『LIFE』第9回／子育て

《登場人物》

朱美

由紀（朱美の友人）

リサ（朱美の子・3歳）

お婆さん

由紀　そう。この子が3歳なの？ お名前は？

リサ　（小声で）リサ。

朱美　リサ、もつと大きな声でお返事するのよ。

由紀　あー、可愛いわねえ。お目めパッチリで

お人形さんみたい。

朱美
こんな状態で行けないもん。

朱美
今お昼寝してるのが、1歳半の健太郎と

由紀
その報告もあつてね。

5カ月の麻衣。

由紀
朱美も偉いわねえ。29才で3人の子ども

朱美
由紀の話は延々と続く。友達の新況、フ

の母なんだ。少子化に貢献してるじゃん。

アクションの話題、おしゃれなレストラン

朱美
あはは、そんなこと考えたこともない。

の話…。私は時計をチラチラ見る、も

由紀
ご主人、手伝ってくれるんでしょ。

う5時近い。夕食の支度をしなくては…。

朱美
全然。会社忙しい忙いって。

それに気付いた由紀が。

由紀
そうなの…。

由紀
ああ、私、明日もお休みだから大丈夫よ。

朱美
由紀は結婚する予定は無いの？

心配しないで。

由紀
うーん、今のところはね。仕事も面白い

朱美
「私は忙しいの！」。心の中で叫ぶ。で

し、30代でもいいかなあ…なんて思っ

ても、せつかく来てくれたのに、「帰って」

て。そうそうこの間の短大のクラス会、

とは言えない。

朱美来られなかったでしょ。

(赤ちゃんの泣き声)

朱美　　ごめん由紀。麻衣にミルクやらなきや。

由紀　　ああ、うん。じゃあ、また。

朱美　　タイミング良く泣いてくれたものだと、

変なことで感謝する。それからは大忙しだった。食事をさせて、お風呂に入れて…。夜、鏡の中の自分の顔を見る。ひどい顔、髪はボサボサ、口はへの字に曲がっている。そういえば…。

リサの声　　ママのお顔、こわい。

朱美　　(間をおいて)　いつかりサがそう言っ

いた。だって仕方ないじゃないの。こん

なに忙しいのに、睡眠時間だって少ない

し、楽しみなんで何もない。由紀は私を

見て、結婚なんてしないほうが良いと思

ったに違いない。

(チリンチリン、道端の自転車のベル音)

朱美　　子どもたちを連れてスーパーからの帰

り、家の近くまで来た時、リサが立ち止

まり、よそのお庭のヒマワリの花を指差

した。

リサ　　ママ、見て、お花が笑ってるよ。

朱美　　私はぼんやりとヒマワリを見る。花に目

や口があるわけじゃなし…。ただ咲いて

るだけで、笑ってるわけじゃない。

お婆さん (突然) あらまあ。

朱美 あっ、すみません。

お婆さん (笑う) どうして？

朱美 だって…よそのお庭を。

朱美 「すみません」というのは、最近の私の

口癖だ。スーパーでベビーカーを押して

子ども3人連れて通る時、嫌な顔をする

人がいる。私は「すみません。すみませ

ん」と言つて通る。

リサ ママ、ヒマワリがわらつてるの、おひさ

まみたいね。

お婆さん あらお嬢ちゃん、いいことを言うわねえ。

本当にお日様みたい。あ、どうぞお庭に

入つてゆっくり見てちょうだい。

朱美 でも…。

お婆さん どうぞどうぞ、遠慮しないで。お嬢ちゃ

んにはヒマワリのお花切つてお土産にし

ましようね。そうしたら、お家の中にも

お日様がいるみたいよ。

朱美 すみません。

お婆さん あらまた…。あなたはねえ、3人ものお

子さんを育てているの。子どもは神様か

ら授かった宝物よ、偉いわ。社会に貢献

しているのよ。

朱美 そんなこと考えたこともありません。私

は、社会とはかけ離れているって。独身

時代のように会社で働いて、何かの役に

立っているわけではないし…。

お婆さん 何言ってるの。お子さんは将来成人して

社会にかかわって行くの。だから、子育ては社会に貢献よ。

朱美 社会に貢献？

お婆さん だから胸を張って、自信を持ってね。

朱美 はい。

お婆さん あなたのお家は近いの？

朱美 その角を曲がった所です。

お婆さん じゃあ、これからも遊びにいらっしやい

ね。お子さんのお守りぐらいい手伝いできるわ。

由紀

朱美、幸せそうだね。私も結婚して子どもが欲しくなった。

朱美 帰り道、自然に顔がほころんで来た。「お

花が笑ってる」。疲れ果てた私の顔を見

由紀

て、あのお婆さんは「社会に貢献」なんて、おまじないを私にかけたのかもしれない。それでもいい。大事な仕事を引き受けている。「子育て」という仕事だ。

こんにちわー。朱美ー、久しぶりー、差し入れいっぱい買ってきたよー。

友達も家に呼ぶようになった。そして、

親バカ丸出しで子どもの自慢話をする。

KONKOKYO

金光教本部 ラジオ放送係

【住所】 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷 320
【電話】 0865-42-6453
【FAX】 0865-42-2114
【メール】 w-master@konkokyo.or.jp